

庚

武家名目抄

職名部廿二

第卅九冊

庫文閣内	
一五三函 四上五	三六〇九一 六〇冊
	和書

内閣文庫	
番號	和 36091
冊數	60 (39)
函號	153 276

共六十



3

276

御元服摠奉行

御昇進奉行

御拜賀奉行

御判始摠奉行

御産所摠奉行

嫁娶摠奉行

御元服奉行

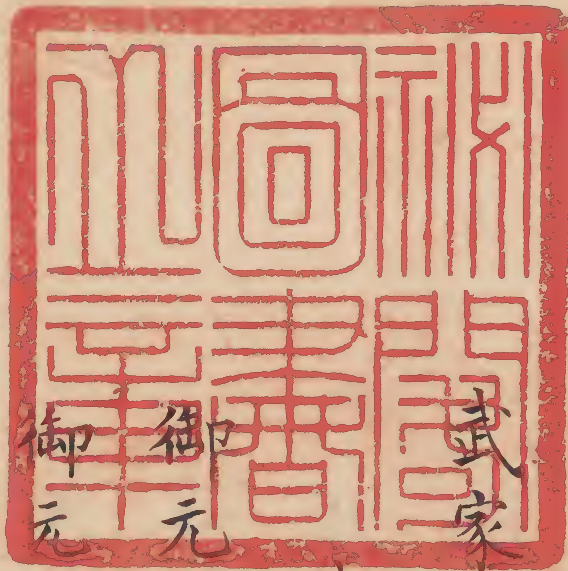
御拜賀摠奉行

御吉書奉行

御判始奉行

御産所奉行

又稱御産所右筆



武家名目抄第卅九冊

職名部卅二

御元服總奉行

御元服奉行



吾妻鏡脱漏云嘉禄元年十二月廿九日乙卯若君御方御首服申刻於二棟御所南面有其儀後藤左衛門尉基綱今日為奉行也出御時刻二條侍從教定奉扶持之武州陸

奥守義氏已下被著侍座次元服雜具被置之駿河守候陪膳周防前司親實右馬助仲能等為役送理髮加冠武州御名字賴前春宮權大進俊道朝臣撰申之

吾妻鏡云寬元二年四月廿一日辛卯今日

將軍家若君

六歲御名字賴嗣御母中納言親能卿娘大宮局

御元

服也依被用嘉祿之例前佐渡守基綱奉行

鹿苑院殿御元服記云御祝儀式次第

應安元年

四月朔日

云々奉行攝津掃部頭能直松田左衛

門尉貞秀齋藤太郎左衛門尉利貞加冠以下役人奉行人等皆著白直垂

普廣院殿御元服記云正長二年三月九日

乙卯亥刻御元服云々奉行攝津掃部頭滿

親齋藤加賀守基貞松田八郎左衛門尉秀

藤加冠以下役人奉行人等皆著白直垂仍

御祝砌各一腰進上之則於御前御劔各給之

又云抑御元服奉行事二月十五日被仰付

以來兩三人洒掃秀藤基貞每日出仕上管

領伺事篇目依事繁不及注之就中記錄事

基貞秀藤各以草案持參摠奉行所訖秀藤

之記分神妙也云々事外被甘心了

滿親を以て多し

按忠孝

康富記云文安六年四月十六日丙寅是夜

室町殿左馬頭義成御元服加冠細川武藏守勝

元管領理髮細川民部大輔云々即御立烏

帽子被呂也攝津掃部頭之親持參之渡奉

行攝津掃部頭之親布施民部大夫貞基也

光源院殿御元服記云天文十五歲十二月

十九日壬寅於坂本樹下宅公方左馬頭義

藤朝臣後被号御元服之次第役者之定御

義輝

元服惣奉行攝津守元造朝臣

因舊例御元

服奉行松田丹後守晴秀飯尾大和守堯連

略中御元服奉行兩人何モ大帷子也

澤巽河津覺書云所元服以下條

津殿より
と所元服

の仕度也
家あり

按御軍家所元服の時行事にさしひきき冷り

沙汰もろ事と鎌倉殿乃時より評定引舟

舟航の職掌ありてありてと其家の不職と

定まらざるありて又惣奉行とり名もす

えらりてと是利殿のせとありてハ評定元

の内松澤氏代ハ元服の事とありす

とと惣奉行と稱せり又その事とあるの事

の人ハ内より二人を定まらざる惣奉行となふ

事ハ内よりむと惣奉行と元服奉行とありて

二人ハ家の定まらざるありてとありて

より命令とありてありてありて

御昇進奉行

松田貞秀記云應安元年四月十五日御元服云々奉行攝津掃部頭能直松田左衛門尉貞秀齋藤太郎兵衛尉利貞廿七日御評定始奏事寺社三个條伊勢石清水安樂寺俗別當貞秀同二年正月一日任征夷大將軍給同五年十一月廿二日御判始御歲十五今日奏事石清水八幡宮御奉寄越中國姫野一族跡事一个條奏事

卅九之四

貞秀同六年十一月廿五日除目御歲十六任參議給兼左近衛中將勲功之賞叙從四位下御位署就御吉事可被書始之由云々被献神寶等石清水其狀為貞秀奉行、上之同廿七日被献之應安八年二月廿七日改元永和三月九日武家御吉書自政所進之如常永和元年三月廿七日石清水八幡宮御社參如常御代始同年四月廿五日御參内始奉行貞秀周清門真少外記

自御誕生之日至于今每度御祝貞秀奉行
可謂御佳例故大將御拜賀行幸御供奉大
臣大饗以下每度于今奉行之記錄公方諸
家在之不及注之

松田長秀記云延德二年七月五日丙辰義
材任征夷大將軍給次御判始云、於御前
管領御太刀進上之一腰直拜領之攝津掃
部頭御太刀進上之一腰拜領
役伊勢次郎
左衛門尉貞

卅九之五

賴二階堂三郎左衛門尉尚行一腰進上之

一腰拜領役同長秀御昇進奉行

領同飯尾左衛門大夫為規御吉書奉行飯尾大

藏大夫兼連御祝奉行

惠林院殿將軍宣下記云延德二年七月五

日丙辰將軍宣下次參議并左中將次從四

位下次御判始云、摠奉行攝津掃部頭政

親淺黃裏打自兼日被仰付了右筆松田丹後守

長秀 同 依為應安例 昨日^四 奉行計被仰付
了御祝奉行 飯尾大藏大夫兼連 淺黄 大帷

按 伊昇進者の名々ソウの以よりを唱
ありしよや不見はゆきしりてたしうあしき
お軍宣下いことしうと任大臣任大おあとの
おるよふハ沙汰を致さしれ多う致しき
ふれと者り人の内ふそ職掌あり者んあ
論

たりく麻苑院殿誕生ありし時 松田貞秀
伊を不れ事と有りし 又此元彼の有りとも
いも給りし沙汰をしと右例とありし 且や
任官大食并質 評定始伊判始引くこと
貞秀の有りしと其職掌ハ長秀死しつとゆ
伊昇進者の不ありしとありし 室町家そ
と何れも麻苑院殿の例と 固准をら進け
後ハ松田氏代とありしとありし

ふまゝのり

御拜賀惣奉行

御拜賀奉行

吾妻鏡云建保六年六月廿七日丁卯將軍
家任大將御之間為御拜賀參鶴岳宮給畢
早旦為行村之奉觸申可有御拜賀之由於
下向雲客等云々十二月廿一日己未將軍
家為大臣拜賀明年正月依可有御參鶴岳

卅九之七

宮御裝束御車以下調度等又自仙洞被下
之廿六日甲子為大夫判官行村奉行御拜
賀供奉隨兵以下事有其沙汰云々

花營三代記云右大將家御拜賀散狀并路

次儀

康曆元七廿五
御出申二點

云々家司惣奉行攝津

掃部頭能直奉行人松田丹後守門真權少
外記松田修理進齋藤四郎右衛門尉飯尾
右近將監中澤次郎左衛門尉飯尾齋藤筑

前五郎左衛門尉

普廣院殿御元服記云永享二年七月廿五

日大將御拜賀中摠奉行攝津掃部頭滿親

飯尾肥前守為種松田八郎左衛門尉秀藤

中澤次郎左衛門尉季總雖為微恙任

御嘉例參勤

觀音寺相國記云永享二年七月十六日今

日渡御三寶院御小直衣御車也御拜賀幕

御習禮於此門跡任康曆佳例可有御沙汰

之故也廿五日御拜賀也新中納言親光每

事申沙汰也武家之儀者攝津掃部頭滿親

朝臣著束帶佇立中門下其外武依康曆御

例申沙汰也但就執柄以下意見被置奉行

家司藏人權右少辨嗣光也鹿苑院殿大將

御初任之時節者猶被用古儀欵御任槐以

來偏被摸攝家之儀至勝定院殿御代面

奉行之處今更立歸可被略之條不可然之

由及御沙汰之故也

慈照院殿拜賀篇目云康正二年四月三日

藤中納言永為御使來御拜賀條々於來月

中者一向不可有其沙汰仍今月中悉可被

仰定其分可存知之申畏承了之由中略一武

家奉行人事四月十四日伺申之時攝津掃

部頭之親飯尾下總守為數也此外猶可相

加欵之由可尋攝津之旨有仰後聞松田丹

卅九之九

後守相加之了

按此記ハ中ノ大納言親通卿の記
あり親通々々當時亦亦侍奉あり

又云武家奉行人攝津掃部頭之親可致沙

汰條々注折紙遣之六月五日也使
左馬助說輔御拜賀

條々一供奉人等御訪用脚事一御後官人三

人事一衛府侍十人事一帶刀十二番事一

御路掃除并浮橋事一地下前駈番長一負

御馬十四匹事此内番長自御厩被出立自

餘諸大名召進之一同御被付總連著十四具事

一移鞍四具事以上先度所見如此此外一
騎打人、事侍所供奉并迂固事同申御沙
汰候欵政所奉行可致沙汰條、注折紙遣
飯尾下總守為數許六月五日也御拜賀條、一
鋪設翠簾長筵等事一隨身所慢事一御笠
持并御笠袋御茵等事一御沓柳筥事居御
沓柳筥事也於御沓者藤少納言沙汰之也
一松明事以上

親長卿記云文明十八年七月廿九日今日
室町殿右大將御拜賀也兼日日次廿三日
延引廿六日又延
引今日治定畢家司右總奉行二階堂山城
中弁政資朝臣觸之
大夫判官政行右筆飯尾大和入道宗勝中
澤備前前司之綱松田丹後守長秀

按武家お察のあはれと建久元年右大補任の時

始まるし、とむやより公家の或ふ准をまじ

わいありとまじはす、とまはをまねい内

裏に治てく廣を夢をりありと後建保
六年右左お相賀の時と實東ゆくと事と
あくれもよく庵後のお公殿と人と謙舎に
下向一持岡の社壇ゆくとお賀ありあり
岡東にありくとお賀のあつたの時と始まらる
て儀式容易あつたときお賀の人の目さ
る趣と者も終つたときお賀のあつた
時治ちりたとき後とつたときお賀のあつた
乃

職掌ありと足利殿のせとちりくとハ柳堂を
系所つてお賀の時と治ちりくとハ
まに内裏つ治てくお賀の時と治ちりくとハ
お賀の時と治ちりくとハ
お賀の時と治ちりくとハ
お賀の時と治ちりくとハ
乃長共つりつて松津氏とつてつてつてつてつて
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

阪尾松田中津の輩あふんとてくそれ副
あつてめよと心来共あつてりてめで
津氏此人を熱意行とてをまゝくさ
あつてまゝくそれをゆて大く、康曆
例日水一、ゆを給とてくそれを
意仁に後く、ゆと二階堂氏共熱意
ゆと勤仕とてくそれをゆと示許意元の
を家ありてあつて

御吉書奉行

吾妻鏡云正治元年二月六日戊辰羽林殿

頼家

下去月廿日轉左中將給同廿六日宣下云

續前征夷將軍源朝臣遺跡頼朝宜令彼家人郎

從等如舊奉行諸國守護者彼狀到着之間

今日有吉書始北條殿時政兵庫頭廣元朝臣三

浦介義澄前大和守光行中宮大夫屬入道

善信八田右衛門尉知家和田左衛門尉義

盛比企右衛門尉能貞梶原平三景時藤民
部丞行光平民部丞盛時右京進仲業文章
生宣衡等到著政所善信草吉書武藏國海
月郡事云、仲業加清書廣元朝臣持參之
羽林於寢殿披覽之給
按吉書武藏書中不取
之後、之、也吉書中

又云建仁三年十月九日甲辰將軍家政所
始也別當遠州時政廣元朝臣己下家司
各布衣等

著政所民部丞行光書吉書令圖書允清定
成返抄遠州持參吉書於御前給之後有
碗飯盃酒之儀
按行光之改
不執事也

又云建保六年十二月廿日戊午去二日將
軍家令任右大臣給仍今日有政所始右京
兆并當所執事信濃守行光及家司文章博
士仲章朝臣右馬權頭賴茂朝臣武藏守親
廣相州伊豆左衛門尉賴定圖書允清定等

著布衣列座清定為執筆書吉書右京兆座
而覽吉書參御所給路次行光捧持之從于
京兆御後將軍家故以出御南面階間覽之
京兆持參彼吉書於御前給京兆又令歸政所給被行坑
飯云、按改所別苗小注く也吉書と持系くく後
以下段段の不行く執事の蔵考ありく之條
鎌倉の軍家の
をりちり

卅九之十四

吉書施行武蔵相摸伊豆持參之齋藤四郎右衛門

尉于時政所執事代五年十一月廿二日將軍家御

判始御年十五執權武蔵守頼之朝臣著直重淺黃摠

奉行治部少輔高秀同右筆松田左衛門尉

貞秀同合奉行齋藤四郎右衛門基兼裝束白直

重御祝事一番御吉書七介於寢殿西間政

所沙汰進之山城三郎左衛門尉元榮持參

于時政所山城中務少輔入道行照法躰之間以元榮勤仁之右筆齋藤四

郎右衛門尉基兼

政所執事代齋藤右衛門入道玄觀法躰之間以男

基兼勤

御吉書以後於當座御一所被聞食

三献次御評定被始行之次御恩沙汰云々

其後於内々御祝雜掌管領沙汰之自御所

惣奉行并右筆合奉行下賜御馬

按ちり合
まはりありハ

所
まはりあり

康富記云寶徳元年四月廿九日己卯被行

吉書儀管領著殿上被行之頭人波多野二

卅九之十五

階堂問注所

野町

攝津掃部等也奉行布施民

部大夫貞基等皆淺黄直垂

重大云々

赤藤親基記云應仁之年三月六日昭日改

元應仁若中納言勅進之一若順礼部仕裏

打一也吉書儀行治河國通一也硬改政所

伊勢之庫
助貞宗

松田長秀記云延徳二年七月五日丙辰義

材任征夷大將軍給次御判始

公方

御座

南

管領著座御吉書七个國被二階堂三郎左衛

門尉持參政所當日計云：長秀御昇進飯

尾左衛門大夫為規御吉書飯尾大藏大夫

兼連御祝奉行

惠林院殿將軍宣下記云延德二年七月五

日丙辰將軍宣下云：次御判始宣下事終

之後被執行之御吉書右筆飯尾左衛門大

夫為規白大七个國武藏相摸伊豆駿文章

卅九之十六

同前下武藏國仰三个條一神事右神之為

神以人之祭祀人之為人以神之加被因茲

守式目專如在礼奠限永代為不朽之勤行

焉一農桑事右國者以民為基民者以農為

天各勵池溝堰堤之勉宜致稻穀紬絹之備

矣一乃貢事右諸國之濟物任土之貢賦早

守每年之所當可致合期之進納焉以前三

个條所仰如件以下延德二年七月五日御

吉書七通

入葛籠

為規今月二日巳刻渡侍雜

仕當日雜仕持參之列居葛蓋御硯等渡御

硯役二階堂山城三郎左衛門尉尚行大請

取之直持參于御前被加御判之後給之相

退如己前渡雜仕了

光源院殿御元服記云天文十五歲御元服

當日十二月十九日翌廿日新將軍又御出

座定賴朝臣以下評定衆如前各著座各令

卅九之十七

披露次第飯尾大和守堯連松田對馬守盛

秀飯尾彦左衛門尉盛就中澤掃部助光俊

松田九郎左衛門尉賴隆松田次郎左衛門

尉賴忠其次座ヨリ晴秀出テ披露又著座

堯連盛秀ハ大帷子ヲ脱テ各奉行衆ノ如

ク裏打也盛秀ハ御吉書奉行十條大帷

子也

按己上六條ハ多記
お軍衣の裏打也

鎌倉年中行事云御吉書多分二日也但日

限不定關東御分國ヲ被註執事代ヲ召具
シテ政所有出仕可有御判物ヲハ執事代持
參御硯ヲハ政所之子息持テ被參時御判
有其後又執事代參御判物ヲ給政所ノ子
息參テ被罷出タル後先御式三献アリ式
三献過テ後政所御劔進上別而有御酒被
下御劔也

按此古書始々建久二年一政所下之

事あり〜とゆ〜根元とゆ〜これより〜お
軍家以勢お濟の時々勿偏仕更移洗改元と
ゆ〜れ改ま〜事あり〜わ〜ら〜か〜ゆ〜の事
を新あり〜わ〜い〜り〜日政所執事代
ゆ〜〜他の書り人〜も古書ノ右邊〜
取改と〜を〜る〜古書を法書ハ志〜
ゆ〜は古書を〜り〜但鎌倉殿の時不
ゆ〜〜古書を〜り〜〜各々〜

軍家御判始御年十五執權武藏守頼之朝臣著直

兼淺兼惣奉行治部少輔高秀同右筆松田左

衛門尉貞秀同白直合奉行齋藤四郎右衛門

基兼裝束白直次御評定被始行之次御恩沙

汰云、石清水八幡宮御寄進以越中國姫

野一族跡御奉寄之彼御寄進狀於當座礼

部渡進執權於別座施行判畢同夜被召八

幡御師御寄進狀并御施行被仰渡畢其後

於内、御祝雜掌管領沙汰之自御所惣奉

行并右筆合奉行下賜御馬自管領惣奉行

銀劔一腰馬一匹置鞍、送了按七条ありとありと
此判始書ありと

いふ合書ありとありと
此書書ありとありと

惠林院殿將軍宣下記云延徳二年七月五

日丙辰次御判始宣下事終之後被執行之

惣奉行攝津掃部頭政親淺黄裏打自兼日被仰

付了右筆松田丹後守長秀同依為應安例

昨日奉行計被仰付了

光源院殿御元服記云天文十五歲十二月
廿日若君義藤朝臣征夷大將軍從四位下
禁色昇殿宣下有之同日新將軍御評定始
御判始等有之御評定始闔役松田九郎左
衛門尉頼隆奏事飯尾大和守克連御判始
奉行松田對馬守盛秀云々新將軍御出御
著座其後各々著座有テ御判始有之御物

卅九之廿一

七通ヲ硯ノ蓋ニ入伊勢守貞孝持參シテ
管領代定頼ニ渡サル定頼又御前へ持參
御判スエラレ畢テ管領蓋ニ入貞孝ニ被
渡之貞孝持テ出侍雜司ニ被渡之奉寄御
判物侍雜司ヨリ康定請取持參御前ニ置
著座御判スエラレテ後又罷出康定取申
サル次御硯取申ス侍雜司ニ被渡御判
物ハ元造朝臣取テ管領へ渡善法寺へ管

拾列乃款式のやうにありしは、これハ普賢院殿
とす。之後、あるは、小石寺書始ありて、御軍
宮下乃後、判始なり。例も、いそぎ
— あつ—
普賢院殿也。 折女無きなりと
殿記—
洋宮元乃、是ありて、ありて、元と定まらる
家々もありし。普賢院殿より後、拾列
氏小浪、是ありて、ありて、又—
と、慈安乃例ありて、是、松田氏の是、拾りて、

あつ—

御産所惣奉行

御産所奉行 又稱御産所右筆

吾妻鏡云、壽永元年七月十二日、庚辰、御臺
所依、御産氣渡、御比企谷殿、被用、御輿、是兼
日被點、其處云、十葉小太郎胤正、同六郎
胤頼、梶原源太景季等、候、御共、梶原平三景
時、可奉行、御産間、雜事、之旨、被仰付云、

又云建久三年七月四日甲戌御産間御調
度等今日調進于御産所三浦介千葉介等
差義村常秀令奉行之亦被定鳴絃役人等
梶原源太左衛門尉景季奉行之

又云仁治元年三月七日辛未將軍家若君
御五十日百日也於寢殿南面有其儀信濃
民部大夫行泰布為奉行

又云文永元年十一月十六日癸巳午尅御

卅九之廿四

息所御著帶御驗者大納言僧正良基醫師玄

蕃頭丹波長世朝臣御陰陽權助政茂朝臣

宿曜師大夫法眼睛尊也太宰少貳景賴奉

行之廿三日庚子今日御息所御産御祈以

下事被施行之奉行太宰少貳景賴出家之

間縫殿頭師連奉之二年九月一日丙申辰

剗御息所有御産氣群參人、不知其數中略

縫殿頭師連式部太郎左衛門尉光政等奉

行此間事云々 按己上只條と縁合
お軍家此よりあり

天正本太平記云 直義室
産條 貞和三年二月九

日直義室著帶十リ其儀又嚴重十リ御帶

ノ加持青蓮院二品親王尊圓使ハ兵庫助

高階重直御産奉行粟飯原下總守清胤十

リ

房玄法下記云親應二年三月廿四日相公

羽^{義詮}林清基著帶加持事奉行中系刑部少輔

二階堂能登号右筆松田右衛門尉白井彈

正忠彼事^中云以清使^中子細云々

表^中廿七日^午刻^中可有^中清^中着^中常^中以^中常^中持^中系^中使^中

者可^中系^中入^中兼^中有^中清^中存^中念^中也^中云々

松田貞秀記云自御誕生之日至于今每度

御祝貞秀奉行可謂御佳例欵大将御拜賀

行幸御供奉大臣大郷食以下每度于今奉行

之云々 按貞秀ハ室篁院殿より藤花院殿まゝなり
其のありは誕生ハ藤花院殿の誕生とあり

所産新日記云普慶院殿極此時若君沙遊義勝

生永享六年二月九日寅刻了晴風靜也清

序不波多野因幡入道元尚宿不尋司西洞

院隨役人惣吉新二階堂方丈判官之忠右

筆松田對子方貞清九日沙不極也誠之時

沙胞衣緒次中此也無白沙竹刀數二役

二階堂方丈判官之忠進了了白也無着也

産石之千个日皇宿御候ノ輩崎経役人名姓

卅九之廿六

略二階堂方丈判官之忠松田對馬方貞清

此為人志每日出仕禮儀夜不退出卜云々

又云於沙産石也宿初ノ事九ヶ月ニテ

ア儿一キ也柝八月ニテ十月ニテ七沙宿

始ハ沙沙始ア儿ニシキ也沙産石ノ沙具是

大茶具出來ア儿ハニ或也湯殿或也産ア儿

一キ沙産石或也此也每風沙押桶也机帳

以下也産石ノ此具是皆ノ調由來アテト

ハヘラレテ此宿初有ヘシ此宿初アリテ後ハ
此宿名ニ御モ作事アルマシキ事也竹訂
ノ一モウツヘカラス如地記福ハ惣事同
右条ノ方ニアルヘシ自然ハ白ノ夕メ没垂
也也

又云南沙新様 義 此宿新方此役ヲ勤申子
政 細々守家カ祖父守定康苑院殿柳沙誕生
勤トタリシ此新例也同役人惣事同右条

此幕目役此島陸役等々此時一人数ト云

按守家ハ醫師
大徳亮也

又云享徳三年七月十二日此娘君沙誕生
役人二階堂左美判官松田丹後守 已下姓
名略之

四年正月九日此娘君此誕生役人以下事
同前長祿二年後正月廿七日之夜娘君此
誕生役人以下同前三年正月九日夜明卯

長同此誕生役人者同前

又云天文四年十一月一日戊午也
先例二階堂中務大輔有泰被_作出
則清清_入之_清不_吉方_英清_若第_日
次有泰胡_長勳進_中十七日_江相_定了_後者
以_先例_之相_觸由_江治_出了_右相_白丹_後
守_晴秀_己下_姓十二月十九日就_以序_系清
祇_方用_途之_成清_下知_玉之_細川_右
系_古夫_及河_内能_良若_名越_若等_也清_下知

清_序不_出役_要脚_事其_年二_月以_先例_之
可_以被_之江_治由_右相_白丹_後也_仍轉_達如_件
天文四年十二月十九日_前丹_後与_晴季_中務
大_輔有_泰_諸國_同系_五年_正月_十二_日江_越前_治
不_知返_事之_江治_云清_序不_出役_係清_用
脚_事以_先例_之、_江治_由也_有書_相見_也
也_以目_出存_也要_細境_小之_席了_中也_之漢
言_正月_廿三日_二階_堂中_務大_輔殿_松田_丹

後守殿宗淳 按唐玄法平記下七條ハ
宗淳が軍家のものなり

按此度不孝の事と云職名を是利殿の時ふ
起りたる事と云深余殿の事と云孝の元れ
不職と云て唐所の河法をうけ持つる事と
ありふとありと云りとは是利殿の代とありと
康苑院殿誕生の時洋定元の内中條二階
堂の事輩と云事と云り一孝の人の内より
松田白井の二氏は一守の事なりと云る

くろく一々佳例と云る二階堂氏に在るは唐系
忠孝の事あり松田氏に一孝の事ありを
命と云る事ありと云る事ありと云る事あり
まゝと云る事ありと云る事ありと云る事あり

嫁娶惣奉行

吾妻鏡云寛喜二年十二月九日丙寅將軍
家御嫁娶事内、有其沙汰為助教師貞奉
行召親職晴賢等朝臣被仰日次事二人共

行末元乃軍事に係るべし此不致しき
乙卯

武家名目抄第卅九冊

藤原忠禮書

卅九之卅一

